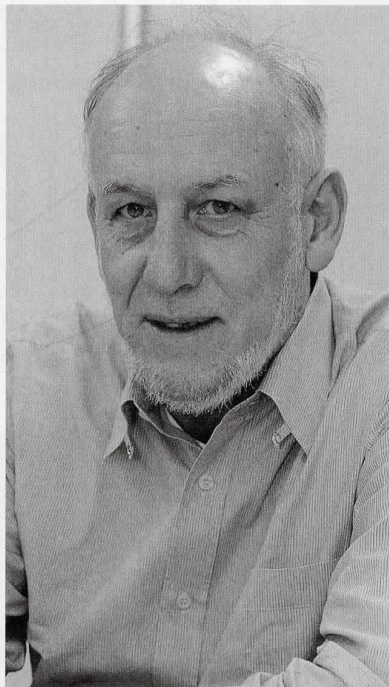


EARRとティム・デ・パラヴィチーニ その圧倒的存在感の源に迫る

■田中伊佐資

「アナログ」というフィルターを通して見ても、「デジタル」というフィルターを通して見ても、圧倒的存在感で浮かび上がる——EARRは、そんなブランドのひとつである。根底にあるのは「オーディオ装置は独自の音を持つてはいけない」というテーマ。シンプルとはいえそれを時代や周囲に翻弄されることなく貫くのは、簡単なことではないだろう。この秋のオーディオイベントシリーズン、代表ティム・デ・パラヴィチーニ氏にその真意を自ら語っていただいた。



● Founder
Tim de Paravicini

先日「ハイエンドショウトウキョウ」に出展したヨシノトレーディングで小一時間ほどしゃべらせてもらった。これは衛星デジタルラジオ・ミュージックパードの公開録音という形式でもあり、ジャズ・ボーカルのLPを聴くという趣旨だった。アンプはもちろんEARRの最上位機種である。

収録中、地味に座っていたEARRの総帥ティム・デ・パラヴィチーニ氏がいきなり立ち上がり、つかつかとターンテーブルに歩みレコードをかけた。事前に打ち合わせしていなかったのでも食らったけれど、そのフランク・シナトラの「Sinatra's Swingin' Session」が素晴らしかった。まだ発売されてい

ないモバイル・フィデリティ(MoFi)のテスト盤だった。パラヴィチーニ氏はMoFiに技術提供している関係でそれを持っていたのである。

翌日、パラヴィチーニ氏に会ってすぐそのMoFiの話になった。僕が知りたいのは、MoFiもそうだけどもEARRがそういった多くのエンジニア

から信頼を寄せられ、超ビッグネームのミュージシャンが愛用する理由や経緯だった。

「MoFiは2002年に社をあげてもっと音を追究しようとオーディオ・ドリームチームが結成されたんですね。それ以前に自分で手を加えたカッティング・システムやスチューダーの

テーパーレコーダーを納入した実績があったので、アンプとリマスター機器の製造担当として参加しました」

MoFiのディスクには、パラヴィチーニ氏との深い関係を示すように名前がクレジットされているものもある。

なぜプロから指名を受ける存在となったのか？

もともとEARRはコンシューマー・マーケットでスタートしている。アンプメーカーは世に数えきれないほどあるのに、なぜプロから指名を受けるようになったのだろう。

「プロのマーケットにしゃしゃり出た



わけではないんですよ。創業当時は知名度がなくて販売面で苦労しました。だけど少しずつ評判が評判を呼んで、プロからも引き合いが来るようになったのです。最初に認めてくれたのは、アイランドレコードのカッティング部門だった「サウンド・クリニック」のジョン・デントさんでした。なにか大きなアンプをつくってくれということ、真空管で数百ワットのアンプを入れてみたら音が激しく変わった。そこでシステムにも手を加えて、これはすごいということになりました。それから全面的に任せてもらって彼のラボには思い通りに機材を納めることができました」

ジョン・デントはポップ・マーリーやU2を手掛けたエンジニアである。業界内でも自然とEARの名前は広まってきた。

人はパラヴィチーニ氏を鬼才とか天才とか呼ぶが、それは「アンプづくりの」という範疇にとどまっていけないことに気づかされる。アンプだけでなくコンプレッサーもタイプ・マシンのも、氏の手が加わるとクライアントの要望通りの音になっていく。しかも電気工学を学校で学んだわけではなかった。アンプ回路も含めてすべて独学なので

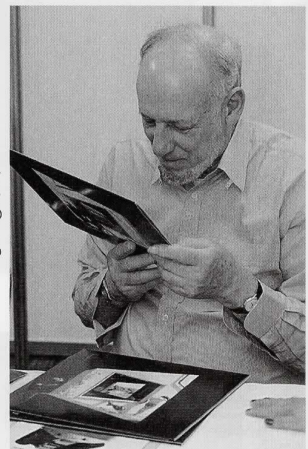


10月5～7日 東京交通会館にて開催された「ハイエンドショウトウキョウ2012 AUTUMN」には、EARの国内輸入販売代理店を務めるヨシノトレーディングも出展。展示スペースには同ブランドのラインアップの他、ノッティンガム・アナログ・スタジオやクリアオーディオ、デュペル、ディアパンの製品群、さらにはパラヴィチーニ氏スペシャルカスタムメイドのテーマシンなどが展示された。今回はこのショウにあわせて来日したパラヴィチーニ氏に直接インタビューを敢行した
◎ヨシノトレーディング ☎050-3375-3975、0533-75-6306

ある。自動車が好きで、そのエンジンアリングは学校で習ったそうだ。「オーデオも車も数学的には一緒のような気がする」と言っていた。パラヴィチーニ氏の家系は数学者で、氏もその血筋をひいているわけだ。

トラブルを見つけて直すのが好き：ラックスからスカウトされ日本在住の過去も

氏は6歳くらいからラジオなどをばらしては組み立てることを繰り返していたという。アンプは13歳ごろからつくり始めた。おこづかいも手に入る



インタビュー中、ピンク・フロイドのレコードジャケットを子エックするパラヴィチーニ氏。プロの世界との深い関わりを示すように、名前がクレジットされている盤もあるという

パーツも限られていたので自作するしかなかった。また自作したほうが音はよかった。

21歳のときに南アフリカに渡り、アンプとトランスの会社を設立した。トランスはオーディオ用というわけではなく全般を扱っていた。自分で管理しながら巻いていたという。そのかたわらオーディオの修理もやっていた。トラブルを見つけて直すのが好きなんだそうだ。当時ラックスの販売代理店からメンテナンスを請け負っていた、その技術が見込まれてラックスからスカウトされ、設計エンジニアと

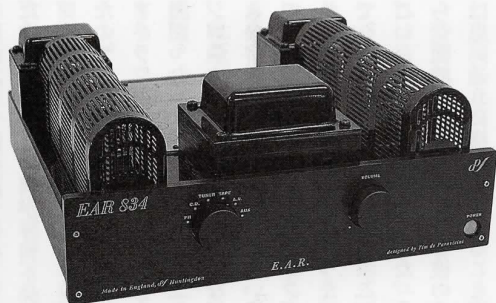
して日本に在住していたというのは有名な話だ。やがてイギリスに戻り、78年にケンブリッジでEAR社(Esoteric Audio Research)が設立される。

ここでまたプロ・マーケットの話に戻った。

ふと「アメリカにあるジェームス・ガスリーのスタジオにも機材を入れたな」という一言で、もう少し突っ込んでみた。

ガスリーはピンク・フロイドやケイト・ブッシュ、TOTOなどを手掛けている名匠である。2001年の『エコーズ』啓示ザ・ベスト・オブ・ピンク・フロイド(初の本格的なベスト・アルバム)はガスリーがプロデュースをしていて、「音に貢献しているので名前をいれるべきだ」とティム・デ・パラヴィチーニのクレジットも入っている。

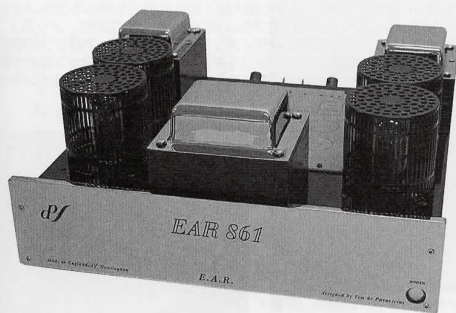
「そのつながりで、デビッド・ギルモア(ピンク・フロイド)が持っている『アストリア』というスタジオの機材もチューニングしています。ギルモアのギターアンプにも手を入れていますよ。そのスタジオは船のなかにあって、



EARのプリ・メインアンプは、899 (¥1,029,000) を筆頭に、現在5モデルが国内で展開されている。中でも注目したいのは834 Custom (写真 ¥512,400)。日本特有の電源環境にも配慮しアレンジを加えて仕立てられた日本限定販売 (100台) の特別機だ



プロスタジオ仕様最高級コントロールアンプ「912」のノウハウをふんだんに盛り込み、同様の真空管やトランス、MCトランスからフォノステージまでを採用するのが、868PL (写真 ¥1,029,000)。フォノイコ部非搭載の868L (¥732,900) も用意されている。コントロールアンプは他に834L (Black仕様 ¥186,900、Deluxe仕様 ¥291,900) など3モデルを展開



パワーアンプに名を連ねるのは、モノラルタイプの509 II (¥1,878,450pair) をフラッグシップに合計4機種。中でも861 (写真 ¥1,026,900) は、プリ・メインアンプ869に搭載のアンプ回路「エンハンス・トライオード・モード」を採用。斬新と称された独自技術とともに、「心地よい音、音楽」への執着が踏襲されている



同社製フォノイコライザーの最新モデルはEAR 834P De-Luxe (ボリューム有り: ¥291,900、ボリューム無し: ¥278,250)。フォノイコライザーは他に324 (¥618,450)、88PB (¥723,450) などがあり、アナログ関連製品として他にMC昇圧トランスMC4 (¥260,400) が用意されている

遊びに来たリンゴ・スターをはじめ大物ミュージシャンが音を気に入って、アンプの注文を受けたりしていますね」

アンプしかできませんというのではなく、トータル・オーディオネットワークやコンサルティングができるからスタジオからは引く手あまたなのである。また「プロから認められれば必ずコンシューマーにも好影響になるとは思っていた」という予想通り、ハイファイ・オーディオのマーケットでも着実に実績を上げていく。

「全真にEARを好きになってもらおうとは思ってない。ただし——」

さてバラヴィーチーニ氏にこういっても訊いてみた。あなたがオーディオ・ショップの店員で客が来たとする。EARのアンプの音はどう説明しますか。

「ワイドでクリアなサウンド。もうちょっと説明を加えるなら、真空管の音でもトランジスタの音でもない。真空管アンプにはトランジスタの

フィーリングを、トランジスタ・アンプには真空管のフィーリングが入っているということかな」

僕は「客にはまず音を聴いてくれと言うね」というありがちな答えを予想していたのだが、ちゃんと言葉にしてくれた。そしてさらに続けた。

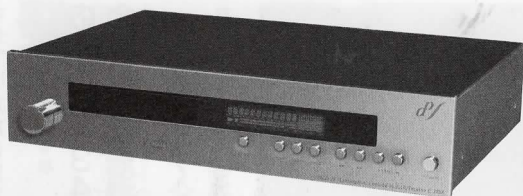
「いまフィーリングと言ったけど、電気のルールだけではなくアートの感覚も大事です。だから100%全員にEARを好きになってもらおうとは思っていない。ただし音に色付けをしてはいけない。あくまでも自然な音にすべ

き。それがEARのフィロソフィです」

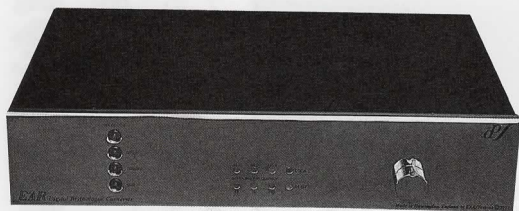
バラヴィーチーニ氏が思う自然な音のなかに、バラヴィーチーニ氏が創出するアートの感覚がある。まさにその通りで、その哲学に人が集まってくる。回路がどうのこうのではなく、まさに設計者のフィーリングに魅せられるのだ。

「既製品の回路に似せたり踏襲したりすることはやりたくないですね。あくまでも独自の設計で製品をつくるのがモットーで、それで勝負したい」

今後、イチ押し製の製品を聞くと「D

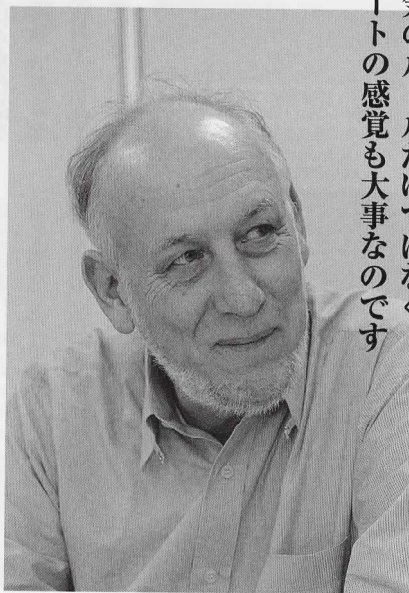


Acute III (Black仕様¥837,900、Chrome仕様 ¥924,000)は管球式のCDプレーヤー。アナログ式のボリュームを装備し、ダイレクトにパワーアンプをつないで駆動することも可能。光/同軸に加えUSBデジタル入力も備える



この秋の目玉製品は、“アナログな響き”が志向された管球式D/AコンバーターのDACute (Black仕様 ¥764,400、Chrome仕様 ¥837,900)。音声信号は独自設計のアナログフィルターを通過し、同社プロ用オーディオ機器の要ともなるPCC88 (×2)とトランスが連結された「チューブ式トランスカップリング」装備の出力段を介して出力される。デジタル入力は同軸、光に加えUSBも装備。大きさ435W×95H×320D mm

電気のルールだけではなく、
アートの感覚も大事なのです



ACute (ダ
キュート)と
返ってきた。

「これはアナログ
の温かみや気持
ちよさを求めた
DACです。基

の延長線です。

「プロやコンシューマーからSACD
プレーヤーの要望も強く、その開発も
進んでいるという。SACDはマー
ケットとしては飛躍的に拡大はしてい
ないから、これは挑戦になるだろう。

「やはりディスクを持っている人がい
る以上、手助けをしたい気持ちがあり
ます。ダウンロード音源よりもディス
クというモノが好きなので、取り組み
たいと思います。生涯ずっとチャレン
ジを続けてきましたが、その精神は
ずっと変わらずいきたいですね」

天才的な人ほど、気まぐれだったり
感情のおもむくままだったりするが、
パラヴィチーニ氏は何事にも意欲的
だった。飛行機のパイロット・ライセ
ンスも55歳で取ったと聞いてなるほど
と思った。